

氏名：	勝田 仁美
学位の種類：	博士（看護学）
学位記番号：	乙第2号
学位授与年月日：	平成27年6月26日
学位授与の要件：	学位規則第4条第2項該当
論文題目：	排泄障害のある学童と親が排泄問題に向かう体験の構造 The structure of experiences of facing voiding problems in children with elimination disorders and their parents
論文審査委員：	主査 片田 範子（兵庫県立大学） 副査 坂下 玲子（兵庫県立大学） 副査 野並 葉子（兵庫県立大学） 副査 中野 綾美（高知県立大学）

論文内容の要旨

目的

排泄障害のある子どもは、学童期に入ると集団生活ゆえに、失禁やからかわれなどの排泄にまつわる問題が浮上するようになる。子どもと親はそのような排泄問題に向き合っていく必要がある。本研究の目的は、排泄障害のある学童とその親が、排泄問題をめぐって関わりあい生活しながら体験していることを明らかにして構造化することである。

研究方法

研究デザインとして Grounded Theory Approach を選択した。研究協力者は、排泄障害のある学童前中期の通常学校に通う子どもとその母親（父親が主養育者である場合は含む）とした。データ収集は半構成的面接法で行い、分析テーマは、排泄問題にかかわる子どもの体験であり、親の体験であり、また、子どもと親の相互作用と関係性である。

兵庫県立看護大学の研究倫理委員会の承認を受けて実施した。

結果

研究協力者は、16組の親子33名であった。子どもは、1年生7名、2年生2名、3年生5名、4年生2名であった。親は、母親14名、父親1名、父母1組であった。

排泄障害をもつ学童と親が排泄問題に向かう体験の構造として以下のことが明らかとなった。サブカテゴリーを< >、カテゴリーを《 》、コアカテゴリーは【 】で表した。

<興味持たれても負けない>では、からかわれ等の経験があっても単に落ち込んだりせず対処行動を行っていたが、遊びの中でも排泄対処が必要で<友達関係に制約>が生じ、常に外の世界と対峙しなければならない状況に置かれていた。一方、漏らさないよう厳しい排泄管理をしながらも逆に親に<甘えながら頑張る排泄管理>をしてバランスをとっていた。親からは守りや肯定を受け、揺さぶられながらも<自分はダメじゃない>と認める

ところに辿り着こうとしているが揺さぶられ体験は繰り返しあり、子どもは《揺さぶられる自己》の状態の中、成長していった。排泄管理に対し《自分には重要と自覚》し、《みんなと違うが今は納得》できるところに至る《自己の対象化への歩み》を進め、排泄障害のある子どもは【障害に揺さぶられながら自己を育む】体験をしていた。

親子にとって排泄行為や臭いが当たり前なく排泄がタブーでない日常生活を送り、漏れを防ぐために《排泄を軸にして回す生活》を送り、勉強や食事など《苦肉の策の「何でもトイレで日常生活」》を送るという《排泄の見える家族生活》をしていた。親は、学校で《隠すが隠さず得る理解》をし、漏れなどによる《からかわれから子どもを死守》しながらも、子どもに対しては《強く立ち向かうことを期待》し、世間はそれほど甘くないと《配慮の中で生きることへの警鐘》を鳴らし、家族的な世界と世間一般の世界との間で《排泄顕在のタブーにおける調節》を行っていた。また、《子どもの理解と行動のギャップへの困惑》を感じたり、《漏れをタブーにできない子どもへの困惑》があったり、逆に、大変な排泄管理ゆえに《自立の中で甘えの許容》をしたり《自立の中で子どもの負担への配慮》をしていた。排泄管理に対し《手放しできない自立》の状態があり、漏らすといじめられるなどと子どもを脅して《自己の対象化を刺激して自立へ》導くなど、家族的で温かな世界と、世間一般の世界の両方を意識しながら《排泄の自立に対する調節》をしていた。また、親は少々からかわれても《めげない子どもに救われる思い》であったり、《障害のある子どもから教えられる思い》を経験し、《子どもに成長させてもらってきた体験》をしていた。周りからの配慮は有難いが《依存の中で生きてきたことの修正》が必要と感じたり、逆に《厳しい現実ゆえの甘えの受け止め》もして、厳しさと甘えの許容という相反する状況を並立させて捉えていた。そして、子どもの人生なのだから《手助け必要でも主体者に》と望み、障害ゆえ将来に《制限あっても狭めない子の可能性》を方針に育てようとしており、障害のない子どもと一緒に《特別なふつう》の存在と捉え、親は【“排泄障害と歩む自立した人へ”と願う道】を、調節を繰り返しながらたどる体験をしていた。

考察

排泄障害のある子どもと親の体験、および相互作用や、プロセスである成長の基軸が以下のように明らかとなった。

1. 排泄障害のある学童と親が排泄問題に向かう体験は、タブー性のある排泄を社会化させる学童前中期において、親は世間的世界と家族的世界という矛盾する世界の中で迷いなく子どもと関わり、子どもは容易に自己を揺さぶられながらも排泄障害とともに自立的に生きる子どもへと、親子で歩む体験であった。
2. 子どもは、からかわれなど世間的世界で自己が脅かされるような排泄障害が生む問題に対処したり、家族的世界で自己を肯定したりしながら《揺さぶられる自己》を体験しつつも、今は納得して自分と言うものを捉え始めて《自己の対象化への歩み》をすすめており、【障害に揺さぶられながら自己を育む】ことに繋がっていく体験をしていた。
3. 親は、《排泄の見える家族生活》の中で子どもを育ててきており、《排泄顕在が生むタブーに対する調節》や《排泄の自立に対する調節》において、それぞれ相反する世間

的世界と家族的世界の間で並立させながら調節して子どもと関わり、矛盾的世界における自分の一貫性の状態、つまり真逆ともいえる概念を並立させた状態を基本姿勢として生活をしてきた。そのような姿勢で日々子どもと関わりあいながら、子どもに対し【“排泄障害と歩む自立した人へ”と願う道】を歩んでいた。

4. 《子どもに成長させてもらってきた体験》も含め排泄障害のある子どもと親の相互作用は、子ども自身が【障害に揺さぶられながら自己を育む】状況と、親が子どもに対し【“排泄障害と歩む自立した人へ”と願う道】がセルフケアの相補関係にあり、そのような絡み合う関係を持ちながら排泄問題に向かっている体験であった。

5. 子どもと親は、世間的世界と家族的世界を前提とした相反する世界の中で生活をしてきており、親が「矛盾的世界における自分の一貫性」の状態により両世界に対応する姿に、子どもは生後から触れながら成長することで、子ども自身両世界の中で調節できる力を身に付け、障害に揺さぶられながらも自己を育んでいくことに繋がっていた。

Abstract

Purpose

Children with elimination disorders must continuously cope with voiding problems from birth to late childhood which eventually lead to issues that dominate their home lives. However, once they reach school age and begin communal living, a number of other voiding problems emerge. Children with problems such as incontinence are often bullied and face experiences that damage their self-esteem.

The purpose of this study is to elucidate and structure the experiences of children with elimination disorders and their parents in relation to voiding problems in daily life.

Methods

The Grounded Theory Approach was chosen for the study design to reveal the cultural background related to elimination and the complex experiences shared between children and their parents. Data were collected through semi-structured interviews. Study subjects comprised of early to mid-school age children with elimination disorders and their mothers (fathers were included if they were the primary caregiver). The concept for the data collection and analysis process was formed on the basis of the Grounded Theory Approach. Continued comparative analysis was conducted and the formulated concept and its relationships were structured. Analysis was conducted with the parents and children in pairs. The themes of analysis were the experiences of children dealing with voiding problems, the experiences of the parent, and the interaction and relationship between the child and their parent. The research ethics committee of the College of Nursing

Art and Science, Hyogo approved this study.

Results and conclusion

1. Research collaborators

Research collaborators were 33 parents and children (16 pairs). Seven children were in first grade, 2 were in second grade, 5 were in third grade, and 2 were in fourth grade. There were 8 boys and 8 girls. The parents comprised 14 mothers and 1 father and 1 mother/father pair.

2. The structure of experiences of facing voiding problems of children with elimination disorders and their parents

1) Experiences of facing voiding problems of children with elimination disorders and their parents are to follow in pairs for the socialization of elimination under taboo in early to mid-school age. These are that parents cared for their child without perplexity between the conflicting public and private worlds and their child would become an independent person bearing an elimination disability in spite of blowing to their self-esteem ,

2) In a world where the dignity of those with public voiding problems is under threat as a result of teasing or bullying, it was found that these children experienced <blows to their self-esteem> as they battled and dealt with their problems and attempted to reaffirm their self worth. While elimination management was strict, children recognized its importance. Although their methods of excretion were different from everyone else, they accepted this fact and started to understand themselves better. As a result, children took <steps toward their self-objectification>, which led to [self-growth from being jolted by their disability].

3) Parents raised their child in <a family environment open to excretion> where their excretory behaviors and smells were commonplace within the home. This provided a foundation for the child. Parents cared for their child by drawing parallels between the conflicting public and private worlds when they <accommodated taboos arising from obvious elimination> and <accommodated elimination independence>. Furthermore, they lived with the basic attitude that these two contradictory worlds were the same, i.e. that these two opposing concepts can coexist. Parents cared for their child on a daily basis with this attitude and followed [the path of hope that “their child would become an independent person bearing an elimination disability”].

4) Parents not only unilaterally protected their child, but also <experienced being helped the growth as a parent by their child>. The parents and their child accepted that there was a complementary relationship between the child’s personal development when jolted by their disability and the path of hope that “the child would become an

independent person bearing an elimination disability,” and that voiding problem-related experiences were faced by children and their parents in their shared relationship.

5) Children and their parents lived in a world with conflicting public and private spheres. Due to their “self-consistency in this contradictory world”, children grew up from birth exposed to their parents’ attitude toward both worlds. As a result, children obtained the strength to make their own accommodations in these two worlds and were able to achieve personal development while being jolted by their disability.

論文審査の結果の要旨

本研究は排泄障害のある学童前・中期の子どもとその親が排泄問題をめぐって関わり合いながら生活する体験を構造化することを目的としたものである。研究デザインはグランデッドセオリーを用い、親子16組33名をインタビュー対象として情報収集が行われた。こどもの体験と親の体験、子どもと親の相互作用をインタビューの中核に置き、それぞれの体験を分析し統合した。抽出されたカテゴリーは「障害に揺さぶられながら自己を育む」をこどもの体験、「排泄障害と歩む自立した人へと願う道」を世間的世界と家族的世界の中で、存在しながら、相矛盾する価値を同時的に受容する親の体験とした。親子それぞれが世間的世界と家族的世界で直面する課題を調整しながら成長してきたことを表現した研究成果となった。

審査会においては、排泄問題を抱えたこどもに家庭生活から学校生活へと場の変化が加わる時期の生活上の課題を、子どもと親の双方から丁寧に聞き取りを行い、それぞれの体験を表現したこと、データから生じたサブカテゴリーからコアとなるカテゴリーを組み立てたこと、両者の相互作用を一連の情報ととらえ分析をした試みが高く評された。

こどもの障害のとらえ方と親の障害のとらえ方の違いは、子ども自身が障害をとらえずに生活の違いをとらえていること、親は障害を持っているこどもとして対応していることが説明された。「矛盾的世界における自己同一」も親がたどる道の過程として示されており、今後さらにこの点についても概念化されることを期待された。

審査会は、発達段階において、排泄の困難な状況に直面する人の課題に着目し、子どもと親の双方、また相互作用を含めて分析を丁寧に行っていること、その説明力と洞察力の深さを評価した。複雑な手法であり、排泄困難なこどもとともに生活し、遭遇する社会との対立だけではない世界観が見出されたことは、新たな知見であり、今後の看護の方法に示唆を与えるものである。今後も独立して研究を行う能力を備えていると判断した。